

# みんぱく 私の逸品 竜骨車

標本番号 H00000394、H00000308  
地域 タイ王国  
受入年度 1974年

民博文化資源研究センター  
久保正敏

干支えとに合わせて、みんぱくの標本資料を竜、龍やタツで検索してみると、水に関係する資料がいろいろ見つかり、タツが水と縁の深いことが知れる。

そのなかから、揚水器のひとつ竜骨車りゅうこつぐるまをとり上げよう。以前の東南アジア展示場には、水を汲み上げる様子が電動模型で示されていたが、一九九六年のリニューアル時に電動模型は引退、現在展示されているのはタイの実物た二点。竜骨車については既に、本誌一九八五年六月号で田邊繁治たなべしげはる氏がタイのものを、二〇〇四年一〇月号で近藤雅樹ちんどうみやき氏が日本のものをスクリーンポンプである竜尾車と対比させて紹介している。

竜骨車は後漢のころの中国洛陽が発祥の地、その後東南アジア各地の水田稲作地帯に広まっていた。英語で square-pallet chain pump とよばれるように、木製チェーンで、輪状につながれた四角い竜骨板りゅうこつばん（パレット）が人力や畜力で回転し、輪の下側部分が木製の樋ひのなかを上昇して水を汲み上げ、輪の頂点まで運ぶ。宋代以降、中国江南地方の農民が、チェーンにパレットが並ぶ様子を竜の背骨に見立てて命名したとの説が有力だ。

タイでは一九七〇年代まで使われており、みんぱく所蔵の「稲作民族文化総合調査団 第一次調査団（一九五七―五八年）撮影写真」のなかにも、使用中の様子を写したものがあつた。日本では、八一九年に朝廷が普及を図ったものの、水田が未だ少なく、すぐには広まらなかったが、江戸時代には農業技術力の高い畿内を中心に普及していた様子は、多くの絵図などからうかがえる。

パレットと樋のあいだに隙間があれば水が漏れるし、チェー

ンも精度が悪ければ力がうまく伝わらないし、摩擦する。木製だが精密器械であるゆえか、一八七七年に開かれた第一回国勸業博覧会に、滋賀県の川村平兵衛かわむらへいべが竜骨車を出品した。もともと、精密であるだけに保守が大変で、江戸中期にチェーンをなくし、樋を四分の一の円筒に置き換えた「踏車」が考案されてから急速にすたれたが、畿内では戦後、動力揚水機が導入されるまで使われ続けた。滋賀県や愛知県を中心にいくつかの博物館に残る数少ない実物資料から、稲作にかける日本人の思いを確認できる。

